



岡崎市美博ニュース
【アルカディア】

Alcudia

O K A Z A I
C I T Y M U S E U M
N E W S

VOL.27



エッセイ

回想の大原美術館

大原美術館の古典と前衛

早春賦 新たな出会いを求めて
—未公開コレクションを中心に—

本多忠孝所用具足の鹿角兜脇立
榎倉康二と絵具のにじみ

ポール・セザンヌ「水浴」
1883-1887年 大原美術館蔵



岡崎市美術博物館

回想の大原美術館

館長
芳賀
徹

私をはじめて倉敷の大原美術館を訪ねたのは、昭和二十年年代の後半、つまり1950年代のはじめのころだったのではなからうか。まだ駒場の教養学科の学生だったときのように思う。かたわらに友人がいたおぼえはない。教養学科フランス分科一期生の同級には、現大原美術館々長の高階秀爾もいたのだが、彼がいっしょだったわけでもない。めずらしく一人旅だったようだ。

大阪まで夜行の急行で行って、そこから先は山陽線だった。午後、美術館を見終えると、また夜行で東京に戻ったのではなかったらうか。あのころは、アルバイトなどで少々の金が入りさえすれば、よく一人で、また仲間たちと、そんな気まぐれな大小の汽車旅をしたものだった。

あのとき、なぜあんなに性急に思い立って倉敷まで行ったのか。それはよくおぼえている。どうしてもエル・グレコの『受胎告知』とセガンティーニの『アルプスの真昼』という絵を見ないではいられないような気持ちになっていたのだ。

そして二十歳ちょっとの若者のなかに、そのような「大原」への憧憬をよびおこしたのは、他でもない、堀辰雄の文章であった。教養学部時代から大学院にかけて、私は何人かの友人とともに「四季」

派の詩人・文人たちにイカれていた。まずは角川書店から出はじめた三巻本の『立原道造全集』だった。まったくなんの予備知識もなしに、その箱入りのカンヴァス装の本の美しさにひかれて、駒場の駅下の本屋で第一巻『萱草(わすれぐさ)に寄す』を買った。たちまちその詩と散文の美しさに心を奪われてしまった。立原の日記や書簡にも私の心はおののき、第三巻の『優しき歌』に至るまで繰り返し繰り返し、時と所をかまわずに読み耽ったものだった。

同時に夢中になっていったのが、立原の同窓の先輩であり文学の師でもあった堀辰雄の作品だった。彼の小説やエッセイも同じころつぎつぎに角川書店から出版されていた。『風立ちぬ』『美しい村』『晩夏』『薔薇』『花を持てる女』『絵はがき』等々、その題名にさえ恍惚として、新本で古本で買い求めてきては、読み進めるのがもったいないような気がしながら読み続けた。

いま手元にある『堀辰雄作品集第六・花を持てる女』を開いてみると、これは昭和23年12月再版、定価二百六拾円で、裏の見返しに私は「1951年6月24日／夕暮れの散歩道で／たそがれの終りを感じるころうれしさに」などと、おぼえたてのフラ



エル・グレコ「受胎告知」 1590-1603年 大原美術館蔵

ンス語で書きこんでいる。

その堀辰雄の小品かエッセイのどこかで、倉敷のエル・グレコとセガンティーニの絵のことが語られていた。それで私は発奮して倉敷まで出かけたのであった。ところが、いまとなってはそれがなんという題の文章であったかと思いつけない。大学の図書館で全集を繰ってみればわかるだろうと調べてみたが、どの巻の目次にも「グレコ」も「大原」も見つからない。途方に暮れていると、本年1月7日、ちょうど私の大学（京都造形芸術大学）の「ギャラリー・オーブ」での展示会の開会に出席のために、大原美術館理事長の大原謙一郎氏が来学なさった。さっそく大原さんにたずねてみた。すぐにはわからなかった。だが半時間後には解答のメモを渡してくれた。『小品集・絵はがき』（昭和21年7月、角川刊）に収録された「斑雪（はだれ）」という好小品だったのである（初出昭和18年4月『婦人公論』）。

話者の「僕」がある年の十二月末近く、信濃路の雪を見たくて、同地（たぶん信濃追分）に冬を過ごそうとしている友人K君夫妻の山小屋を訪ねる話である。この冬の村を「凄惨な毛皮の外装を着て」うろつく変なドイツ女性の噂話などをしたあとに、暖炉のかたわらでの夕食の間に、「僕」が秋の終りに「倉敷といふ小さな町」の美術館で、エル・グレコの作に衝撃を受けてきたことの告白に移る。

「それのごく小さな『受胎告知図』なんだがね。そこでは、この抒情的な画題に対していただいてある僕たちの観念がもの見事に粉砕されてしまっているのだ。天使は天使で、闇のなかから突然ざらざらと光を放する異常なものとして描かれてあるし、その天使のほうを驚いて見あげてある処女の顔も何かただならぬやうに見える。すべてがいかに悲劇的な感じなのだ。…こんどはこの一枚だけでもよく見てゆかうとおもって、ずぶん一所懸命になつて見てきたつもりだが、どうしてもまだその絵が分かつたやうで分からない。さう、分らないといふより、なんだかこんな絵がこんなところに来てあるのが不思議な気がしてくるのだ。なんだかそれがあるべき場所にあるやうな…それほど何か異様なのだ…」(筑摩版『全集』第3巻)

あの黒い暗い背景のなかから卵形の顔を浮かべて見つめあう処女マリアと天使のすがた——あの絵にはじめて接したときの私たちの驚きと戸惑いと不思議の感覚を、実によく伝えている文章ではなからうか。この引用の前の部分も含めて、文章の行きつ戻りつのためたいそのものが、あの絵の正体と所在のもつバロク的なミステリーをかえって巧みに語っている。二十歳の私は、堀辰雄ほどの画家や画題についての知識もまだないままに、ただ驚きと憧れをもってこの「悲劇的な」名



ジョヴァンニ・セガンティーニ「アルプスの真昼」 1892年 大原美術館蔵

作の前に立ちつくしていたことをおぼえている。

「斑雪」の話者はこの村での一夜の翌日、同行の学生M君とともに、(小海線の)「ガソリン・カー」でハケ岳山麓の野辺山に向かう。野辺山高原のぬかるみの道をあてもなく進むうちに、二人は牝山羊を一匹ひっぱってゆく若い女を先方に見かける。その姿を眺めながら「僕」は「まるでセガンティーニの女みたいだね」と急に倉敷で見た絵を思いだす。そして眞白な雪のハケ岳連峰を眺めやり、いまはじめて、セガンティーニの『アルプスの真昼』の絵が心を動かす理由がわかってくる。

「それは…かういふ高原のなかに生を得てあるすべての小さな生きものもつてある深い味なのだ。それらのものは、ちよつと見ると、何か近づきたいやうな孤独の相を帯びてみえるけれど、それらのものほど人なつこいものはないのだ。それほど切実に、存在の本質にあくがれてあるものはないのだ。」

いまから55年近くも遠い昔、はじめての倉敷で私はこれほどにもセガンティーニの意味を感じとっていたかどうかは覚束ない。しかし立原に誘われて式子内親王やリルケを読み、堀辰雄にうながされて「大原」のエル・グレコやセガンティーニ、またマチスやロートレックに魅せられていた青春は、まだ貧しい日本の貧しい学生のそれではあったけれど、まことになつかしく、貴重である。私はあれから「大原」で何枚、何十枚のエル・グレコやセガンティーニの絵はがきを買って、本棚に飾り、友人や恋人たちに贈ったことであつたらう。

大原美術館の古典と前衛

学芸員
村松
和明

大原美術館といえば、国内最初の西洋美術館というその長い歴史から、古典的な美術館という印象が強いかも知れない。ところが実際には、むしろ前衛と称されるべき美術館と言ったほうがよいだろう。なぜなら、長年に亘って収集されてきたコレクションは、評価が定まった過去の古典作品を購入したのではなく、同時代の新たな芸術価値を積極的に見出そうとする精神で成り立っており、それに一部補足的に過去の作品を加えることで形成されてきたからである。

この展覧会のタイトルに「古典になった前衛たち」と付したのは、このことが含まれている。つまり、収集当時は前衛であった作品が、長い年月を経て、なおも評価を受け続けることで古典の仲間入りを果たした、ということと、もうひとつは、このコレクションが同時代の芸術の開拓をし、その前衛的な慧眼によって形成されたものであった、というその特質についてもあらわしているのである。

大原美術館の絵画収集の端緒は、大原孫三郎の育英事業でヨーロッパ留学した画家、児島虎次郎が、現地で本物の洋画に接したことによって、実物に触れることの必要性を痛感し「日本の芸術界のために」と西洋絵画の収集を孫三郎に懇願したことであった。孫三郎は、その申し入れを受け入れ、収集に関しては児島にすべてを任せた。児島はこの信頼に応えるため、作品の選定にはアマン＝ジャ



ビエール＝オーギュスト・ルノワール「泉による女」
1914年 大原美術館蔵

ンのような現地の知友の助言と協力を得ながら、作家に可能な限り直接会い、代表作にこだわらずに近作をその眼で確かめ、最良のものを入手することに労をおしまなかった。1929年、虎次郎が47歳の若さで他界するまでに収集された半数以上の作品は、このようにして作家から直接買い上げられたものであった。そしてこの死を悼んだ大原孫三郎は、児島の描いた作品とその収集品を公開するための美術館建設に着手、翌1930年大原美術館が開館するにいたるのである。

この収集精神はその後の大原コレクションに一貫している。たとえば今回出品されている、ルノワールの《泉による女》、これは大原家から援助を受けていたもう一人の画家、満谷国四郎が1914年滞欧のおり、ルノワールのカーニュのアトリエを訪ね、制作の依頼を画家に伝え、それに応じて描かれたものであったが、日本にもたらされた時には、まだ絵具も乾いていなかったといわれている。また、児島はモネの作品を購入するために、ジヴェルニーのモネのアトリエを訪問しているが、二度目の訪問でようやくその熱意が通じて1920年に《睡蓮》(1906年)を入手することができたと伝えられている。

いまでも西洋絵画の古典ともいえる存在となったこれら印象派の作品も、発足当時は、斬新な表現であったため、理解が得られることのなかった前衛絵画であった。モネは、社会に迎合することを嫌い、前衛を貫き、反体制的に描き続けたために、長らく評価されることはなかった。第一回印象派展において《印象一日の出》(1872年)はその粗い筆致から「つくりかけの壁紙の方が完成している」と酷評され、ルノワールにいたっては、《陽光の中の裸婦》(1876年)の人体に落ちた光の効果と、紫色の輝きの点として散らしたことが、当時の評論家には肌そのものの色と解釈され「屍体の腐敗状態」と非難されたことはよく知られている。

アンフォルメル系統の作品は、大原美術館において、印象派のコレクションとならんでもうひとつの中核に位置付けられるものとなっている。第二次世界大戦後には孫三郎と虎次郎の遺志をついで、長男の總一郎が西洋絵画の収集を続けたが、前衛芸術の時代に生きた總一郎は、「美術館は生きて成長してゆくもの」という信念をもち、内外の同時代の美術に広く目を向けた。

總一郎は、アンフォルメルに加



今井俊満「早春」 1956年 大原美術館蔵

わっていた今井俊満との交友関係があったことから、彼にとってこの運動は生きた芸術そのものであった。1958年には、今井の案内で総一郎自身もパリに渡り、この新しい芸術潮流に直接立ち会い、早速、作品の収集を始めた。このころに購入されたのが、スーラージュ、アベル、フォートリエなどの作品で、その周辺の画家たちも含めたアンフォルメル系の優品がまとまってコレクションに加わっている。

このように、いまでは評価も確定し、作品の入手も困難となった作家たちも、当時はまだ前衛の旗手として活躍しており、そのなかから優れた作品を見定めて作家から直接購入していったことは、やはり特筆すべきことであろう。日本では、紹介される機会が多いとはいえなかった、これら抽象的な作品を、同時代にすでに収集し展覧に供していたことは、総一郎の収集眼と活動それ自体が、きわめて前衛的であったといわねばならない。

大原のコレクションの中核が印象派に端を発しているのは、少々遅れてはいるが同時代性ということだけではなく、次の二つの事項が関連しているものと考えられる。

ひとつは、近代美術の流れにおいて、芸術の自律性を求め、芸術が運動とかたちで展開された印象派がモダニズムとしてのひとつの起点と考えることができるということ。それはアポリネールからグリーンバーグにいたる論者のいう「純粹性の追及」ということにもつながるものだが、その精神はアカデミズムから脱した自己表現の揺籃であり、開拓精神と純粹さにおいて、大原の収集の方針ともまた、合致しているものと考えられる。

次に、印象派は日本の美術、とりわけ浮世絵の影響が顕著であったことはよく知られているが、戦後の前衛画家たちが影響されたカリグラフィーとしての日本の書道は、二度目のジャポニスムといえるものであった。実際にはこれらの影響の視点は大きく異なっており、たとえば、モネの日本趣味が、いわば表面の装飾的な構成から出発していたのに対して、サム・フランシスの日本趣味は記号と染みで構成された画面をもって、新たな

絵画空間の追求という課題に結びついていた。これらの事実は、ともに日本の芸術と西洋美術の影響関係をはっきりと示したものとなっている。このように考えると、印象派にしても、アンフォルメルにしても、そこに大きなマッセを見ることができる大原のコレクションは、日本と西洋の交差する部分に重点が置かれていることに気づかされるのである。

このように大原美術館のコレクションを再度見渡してみると、創立当時から、その審美眼によって開拓し、決して他者の評価に惑わされることなく、独自の収集方針を定めたくえでコレクションを続けてきたことがわかる。

昨年、大原美術館は、小谷元彦の映像作品《ロンバース》を

収集し公開をはじめたとして話題になったことは記憶に新しい。そこには作品の形態にこだわらず、同時代の新たな芸術価値を積極的に見出そうとする、前衛と開拓の精神を忘れない大原美術館の一貫した基本姿勢を感じずにはいられない。

「大原美術館には革新的な仕事をしている作品を」という総一郎の言葉が示すように、つねに前衛的な表現こそが、後まで残る古典作品となり、そこに込められた作家の表現しようとする強い意志と、大原美術館の前衛と開拓の精神とが響きあうことによって、このコレクションは、いつまでも私たちの心をとらえて離さない、稀有なる存在であり続けることであろう。



小谷元彦「ロンバース」 2003年 大原美術館蔵
Courtesy:YAMAMOTO GENDAI

早春賦 新たな出会いを求めて

—未公開コレクションを中心に—

岡崎市では、美術館・博物館資料として、美術品や歴史資料等の購入を毎年行っています。また、多くの方々のご協力により寄贈や寄託品の受入も進んでいます。これらコレクションは、質、量ともに年々充実の度を増してきていますが、常設展示室のない美術博物館やその規模の小さい美術館では、市民の皆様にご覧いただく機会が少ないのが現状です。年2〜3回開催するテーマ展の中で、新たに収蔵された資料や作品はできるかぎり紹介するようにはしていますが、まだ公開されていないものも多く、本展ではそれを一堂に展示いたします。そこで今回、博物部門、美術部門から、それぞれ出品される資料や作品についてご紹介したいと思います。

本多忠孝所用具足の鹿角兜脇立

学芸員 堀江登志実

今回の展示で出品されている本多忠孝所用具足の鹿角兜脇立は、先祖忠勝のものをモデルとして制作されています。胴や草摺を構成する小札は本小札で丁寧につくられており、金具の随所に本多家紋の立葵紋を配するなど、大名家当主の受注品だけあって精巧な出来栄となっています。本多忠孝は本多家7代目にあたる人で、先祖の忠勝は同家初代にあたります。忠勝子孫の11代目忠肅以降は岡崎藩主となります。忠孝は宝永元年（1704）に7歳にして父の遺領である越後村上15万石を継ぎますが、同6年13歳で亡くなっています。

本品は若くして亡くなった忠孝の体形にあわせて制作されたとみられ、全体がこぶりであり、鹿角の脇立も家祖忠勝よりいくぶん小さいものとなっています。鹿角の脇立は先祖忠勝のものを精巧に再現、忠実に写したといった方がいいでしょう。こうした家祖の着用した具足を模して後世の当主が具足をつくるということは、徳川將軍家の羊歯具足をはじめ、諸大名家でも江戸時代を通じて行われています。徳川四天王の井伊家でも初代直政の赤備え具足をモデルに後世の当主がその模造を作成したことは知られています。

忠勝、忠孝所用の兜の鹿角脇立は木製で張りかけによる手法で形を整え黒漆を塗ったものです。鹿角実物より誇張、デフォルメされた形は見るものにインパクトを与えます。

忠孝の兜は、忠勝兜の脇立は写しているものの、鉢そのものは忠孝独自の出来栄となっています。鹿角の脇立そのものに写しを造る特別の意味があったと考えられます。

忠勝の鹿角の立物は、岡崎市の伊賀八幡宮の神職であった柴田某が鹿角を立物とする兜をこしらえるようにとの八幡宮の御夢想により、作成したものとされています（「本多家紀事」）。鹿角兜をこしらえたところ、忠勝が八幡宮に参詣、具

足師の宅によりその兜を求めたといえます。忠孝が制作を命じた鹿角脇立の造形には、そうした伝承が背景にあると考えられます。

家祖具足の一部を伝統的に取り入れることは、井伊家では今回出品された井伊家5代目直通所用具足にみられる天衝と呼ばれる兜の長大な立物が家祖直政に範をとって造られています。井伊家では歴代当主が赤備えの具足を制作していますが、それらにこの天衝が伝統的に継承されています。

こうした家祖具足の一部を模することはとりもなおさず、家祖の功績にあやかりとうする意志のあらわれかと思えます。家祖忠勝は家康とともに天下統一の事業をなした人物として本多家では崇められ、江戸時代に神として岡崎城内の映世神社に祀られもしました。家祖具足の一部を同家のシンボルとして伝統的に採用することは、江戸時代大名の家祖に対する崇敬、崇拝心の表現ということで興味あるところです。



本多忠孝所用具足 18世紀初頭



本多忠勝所用具足 17世紀初頭



榎倉康二「干渉 (Story No.2)」 1990年



榎倉康二「干渉 (Story No.3)」 1990年

榎倉康二と絵具のにじみ

学芸員 千葉真智子

今回、「早春賦」展に出品予定の《干渉 (Story No.2)》《干渉 (Story No.3)》。ともに生成りの綿布に黒いアクリル絵具を用いた作品で、No.2には、さらに着色木材が貼り付いている。一見すると滑らかで限りなく絵画的な表現形式を採っているかに思われるが、縫い合わされた綿布のつなぎ目と突き出た木材は、凹凸の手触りを感じさせ、作品は単なる「絵画」の形に収斂^{しゅうれん}することはない。また、黒い色面と、画布に転写された着色木材の痕からはもともとの輪郭線を越えて絵具がしみ出しており、作家が直接画布に絵具をおいた後に、絵具が一つの独立した存在として、自らの性質にしたがってゆっくりと布地に浸透していく時間をも想像することができるだろう。

本作品を制作したのは榎倉康二 (1942-1995)。「もの派」と称される「石や木、紙や綿、鉄板やパラフィンといったくもの>を素材そのままに、単体であるいは組み合わせることによって作品とし」「日常的なくもの>そのものを、非日常的な状態で提示することによって、くもの>にまつわる既成概念をはぎとり、そこに新しい世界の開示を見出した」(『もの派—再考』より)とされる一群の作家の一人である。ただしこの「もの派」、戦後日本美術の重要なメルクマールをなしながらも、確固とした指針の基に結集したグループではなく、その定義には今もって多くの揺れを含んでいる。

榎倉自身は、この「もの派」について、「物そのものを提示すれば作品と成りえるという物の使用の仕方」に関わるものとして自らの立場と区別し、「私は、“物”(object)というより“物質”(matter)にたいする興味の方が強い。物体の中から物体を成り立たせている要素を解体し、物質性を引き出して今まで仕事をしてきた。だから「もの派」というよりも「物質派」といった方が当たっている」と述べている。こうした言葉を念頭に置いて榎倉の作品を見わたせば、なるほどもの派の作家がしばしば用いたガラスや鉄板といった「形ある物」以上に「形」以前の存在、「事物」に先立つ始原的な要素が、彼の制作において重要な位置を占めていたことが窺われる。壁に廃油を浸透させた《湿質》や床に敷き詰めた藁半紙に

エンジン・オイルを浸した《場》など、早い時期から浸透性や可変性の高い「油」を好んで使用していたのは、こうした関心に基づくものだと思われるし、その際、時間の経過に伴って形が立ち現れ、変容していく様をイベントとして提示してみせることもあった。本作のように、アクリルを用いるようになってからも、榎倉の大きな関心の一つは、いかにアクリル絵具の性質を「にじみ」という形で現前させるかということにあったように思われる。「にじみ」こそは、作り手である榎倉と油や絵具などの物質本来の性質との中間にあって生み出され、作品化されたものではないだろうか。そこには、作り手の意志を越える物質の力と、また逆に私たちが気づかないでいた物質の力を露にさせようとする作家の力とによる双方向的な作用が働いている。

ここまでで述べてきたような榎倉の作品の特徴は、その作品自体をどれほど魅力的なものにしているだろうか。絵具のにじみは、私たちにそのにじみができるまでの時間の厚みを想像させ、その時間を想うことによって、私たちは、作品の前でゆるやかに充実した時間を経験することができる。そして、アクリルが布にしみ込むように、私たちは、自分の身体が作品の中に浸透し、一体化していくような穏やかな感覚を得ることができるのである。

この展覧会では、ここで紹介されたもののほかに次の資料や作品も出品されます。

《博物資料》長尾家伝来具足

彦根藩主井伊家五代直通所用具

暮戸教会資料「三河大谷派記録」

勝鬘寺資料「永禄一揆由来」など

《美術作品》杉本健吉作

「東大寺遠望」「宇治平等院」「岡崎大樹寺」

菅原健彦作「雲水峡」「淡墨冬華」

伊藤久三郎作「不死鳥」など

INFORMATION

■展覧会スケジュール

2005年12月17日(土)～2006年2月5日(日)

大原美術館展 ―古典になった前衛たち― ルノワール、マティスからフォンタナまで

国内最初の西洋美術館として1930年(昭和5)に現在の岡山県倉敷市に創設された大原美術館は、その長い歴史から、古典的な美術館というイメージが強いかも知れません。ところが実際には、その収集作品のほとんどが同時代の優れた作家や前衛的な視点を持った精鋭たちの作品だったのです。この展覧会は、その意欲的な収集眼によって集められた、今では古典となった才気あふれる名画、67点を一堂にご覧いただけます。

2006年2月11日(土・祝)～2006年3月26日(日)

早春賦 新たな出会いを求めて -未公開コレクションを中心に-

岡崎市では、美術館・博物館資料として美術品や歴史資料等の購入を毎年行っています。また、多くの方々のご協力により寄贈や寄託品の受け入れも進んでいます。本展では、近年新たに収集された資料の中から、まだご覧いただいていないものを一堂に展示いたします。これらコレクションとの出会いは、21世紀を生きていく私たちに新たなヴィジョンを与えてくれることでしょう。

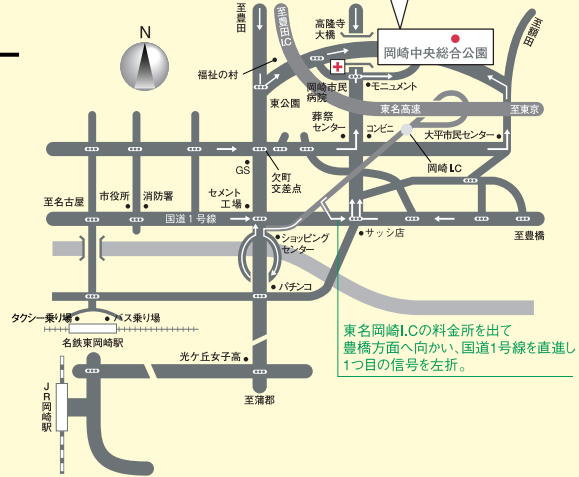
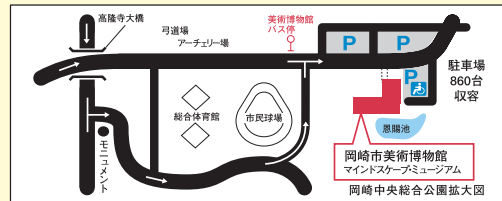
2006年4月8日(土)～2006年5月28日(日)

アラビアンナイト大博覧会

アラジンやアリババなどが活躍する物語で、時代や世代を超えて親しまれてきた『アラビアンナイト』(千夜一夜物語)。本展では、アラビアンナイト成立の謎に迫る文献の紹介に始まり、遊牧民のくらしや女性の衣装、楽器などを通じて中東イスラム世界の文化とそのイメージの変容、さらに美術作品や映画・アニメなど様々なかたちで現代に語り継がれているアラビアンナイト・ファンタジーの可能性に注目して、物語世界の魅力に迫ります。

- 開館時間／午前10時～午後5時(10月1日～5月31日)
午前10時～午後6時(6月1日～9月30日)
午前10時～午後8時30分(6月～11月までの土曜日)
〈入館は閉館時間の30分前まで〉
- 休館日／毎週月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない)
年末年始(12月28日～1月3日)
※展示替えのため臨時休館することがあります。

- ◎公共交通機関／名鉄東岡崎駅バスのりば②より25分、
(名鉄バス) 「中央総合公園」行「美術博物館」下車徒歩3分
- ◎タクシー／名鉄東岡崎駅から約15分
JR岡崎駅東口から約20分
- ◎自家用車／東名高速道路・岡崎ICから約10分



OKAZAKI CITY MUSEUM



【岡崎市美博ニュース／アルカディア】

- Arcadia 第27号 ●2006年1月発行
- 編集・発行 岡崎市美術博物館(マインドスケープ・ミュージアム)

岡崎市美術博物館

〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内
TEL0564-28-5000(代表)
ホームページ <http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/ka321.htm>

額田町と合併した新生岡崎市は本年で市制90周年。そして美術博物館も開館10周年を迎えます。今年はこの記念すべき年に相応しい内容の展覧会やイベントを数多く予定しています。本年も当館の活動をご支援いただきますようよろしくお願い申し上げます。(I.M)



本紙に古紙配合率100%再生紙を使用しています。